

校長室の窓から

楽しい読書(その1) 本はやってくるというお話

教え子の中に、時々私に本を送りつけてくる(いや、送ってくださる)子がいます。その子は、「自分が読んでおもしろかった本」だったり、「先生なら読んでおいてほしい本(本人談・・・根拠が分からん)」だったり、なんだか意味が分からない本だったり・・・。いずれにしても、絶対に私が買わない本ばかり送ってきます。



「送りつけられた本」の中に、時々キュンとするほど私にフィットするものがあって、「あいつやるじゃん」と実は密かに尊敬しています。その中のひとつが、小路幸也『東京バンドワゴン』シリーズです。当時発刊されていた全巻をプレゼントしてくれ、夢中で読みました。「東京バンドワゴン」は、その後、亀梨和也さんや玉置浩二さんのキャストでTVドラマ化されましたね。

また、菅田哲也『武士道シックスティーン』に始まる「武士道シリーズ」は、海潮中学校勤務時に、当時3年生だったSさんに紹介してもらいました。『武士道シックスティーン』『武士道セブンティーン』『武士道エイティーン』と読み切るまで夢中になり、おかげで睡眠不足・・・。「Sさんのせいで睡眠不足だ。」と言ったら、「面白い本、まだありますよ。」って、いかにもいたずらっ子の笑顔で私をからかってきました。彼女は、年間百冊を超える読書量を誇り、「先生の読書は偏っている」とか、「これは押さえておくべき本だ」とか、国語教師の私に「読書指導」をしてくれました。その後、「武士道シリーズ」は完結編の『武士道ジェネレーション』が出版され、シリーズを読破しました。あまりにも面白いシリーズだったので、これで終わってしまうのかと思うと、読み終えるのをためらってしまったほどです。

海潮中勤務時には、山崎豊子との出会いもありました。同僚であった事務職の方が、よく「カラチ支店に行ってくる」と言っておられたことの意味が分からず、「カラチ支店って何ですか?」と聞いたことが始まりです。

「あんた、国語の先生だに、山崎豊子の『沈まぬ太陽』を読んだことがないかね。」

で、次の日、“で～ん”と私の机に置かれたのが山崎豊子『沈まぬ太陽』全五巻(ハードカバー)の山。これが、山崎豊子との出会いでした。

数週間後、「読みました」と返しに行くと、「最後まで読んだかね! ワシが貸した人で初めてだわ。」と嬉しそうでした。

それからしばらく、何巻がよかったかとか、アフリカってそんなに美しいのかとか、ハンティングはどうも・・・とか、日航機関連のところは読むのがつらかったなどな

ど、「カラチ支店」話で盛り上がりました。

恥ずかしながら、その時、山崎豊子を初めて読んだのですが、以来、「運命の人」「華麗なる一族」「大地の子」と読み進め、少なからぬ影響を受けています。先日、絶筆となった「約束の海」を読み終えたことです。

私に本を薦めてくれる人の中で、ちょっと変わった人は、小さい頃から通っている町の本屋の「Yちゃん」(「ちゃん」というには、すでに還暦を過ぎていますが。)

ある日、ふらっと店に入ると、Yちゃんが、「いや～、久村君、いいとこに来た!」と大声+満面の笑みでお迎え。

「『先生』のために取って置いた本があるけん。」

(だいたいYちゃんが「先生」って僕のことを呼ぶときはろくなことがない)

差し出されたのが百田尚樹『永遠の0』。当時、作家百田尚樹はまだ無名といってよく、その後この作家が有名になって活躍するなど、予想もしていませんでした。

ばらばらとめくってみると、意外と面白そうで、「いいかも。」

「だろ～。そう思って、もう一冊しかないけど、久村君のためにとっておいたんだわ。」

(嘘つけ～。売れ残りだろ～Yちゃん。)と思いつつ、「もらうわ。」

で、読んでみるとなかなかの内容。構成の素晴らしさと題材の良さ、日本人的心情に訴え、現代の日本人の姿勢を問うところなど、うるうるとしながら、一気に読みました。

後日、Yちゃんに「感動した」って報告しに行くと、

「でしょ。久村君に合うと思ってたんだわ。」とドヤ顔。ま、しゃくに障るけど、さすが本屋さんだね。

と、まあ、本の内容はほとんど紹介しない「楽しい読書」(その1)でした。

その2 はまたいずれ・・・

